

地域文化としてのいけ花 ——台湾、韓国の活動事例を通して——

小 林 善 帆

Ikebana as Community Culture in Taiwan and Korea

Yoshiho KOBAYASHI

要 約

本稿は日本のいけ花が、第二次世界大戦後も台湾、韓国において親しまれている活動事例を収集し、相互参照を加えることから、いけ花が両国において行われている、その様相を考察するものである。

台湾、韓国におけるいけ花は、植民地期から引き続き行われているといえるが、本来、美的感覚の相違、花材の相違からくる花型の変化、いけ花を置くべき居住空間が異なるなどの点から、日本のいけ花そのものを取り込むこと自体が容易ではない、ということがある。また台湾においては日本のいけ花が、流派家元の免状（許状）発行の下で行われ、韓国ではコッコジ（韓国いけ花）として、日本のいけ花を学ぶことから形作られながらも、その事実を曖昧にするという姿勢のもとで行われて来た。そして台湾では文化教育政策の一環として、韓国では花（植物）を扱う芸術として、植民地期以後も日本のいけ花を取り込んだ。さらに、水面下で親日感情とも思われる状況が見え隠れするものの、両国それぞれ民族固有の插花文化としての歴史的研究がおこなわれ、自国文化としての展開も見出される。

キーワード：いけ花、地域、植民地、活動事例、相互参照、台湾、中華花芸、韓国、コッコジ

はじめに

いけ花は15世紀後期・室町時代に形作られ⁽¹⁾、今日、日本の伝統的な生活文化の一つに数えられる。このいけ花は近代、大日本帝国（帝国日本）の植民地としてあった台湾や韓国において、移住した日本人によって行われはじめ、第二次世界大戦終結後、現在において、両国での活動が見聞きされる。

帝国日本は植民地支配を台湾、朝鮮、樺太、「満洲」（中国東北部）、サイパン島（南洋群島）をはじめとする諸地域で行ったが、これらのなかで特に何十年もの長期にわたり支配をおこなったのが、台湾50年余と朝鮮35年間であった。このため日本の文化がある程度、それは日本人社会中心によるものといえようが、両地域に定着していたと考えられる。

そして筆者の研究成果⁽²⁾から以下のことがいえる。日本が植民地支配を行った地域において、植民地期にいけ花が行われるようになったのは、いけ花を日本人女性を表象するものとして、茶の湯とともに位置づけたことがある。また帝国日本の支配下は戦時期と重なり、いけ花は茶の湯とともに趣味娯楽・遊芸としてあるものの、日本人女性の精神修養として存在する傾向にあった。さらに「内地」（日本）を離れた「外地」（植民地）では、むしろ日本の文化受容環境が整わないなかにもありながらも、熱心に行われる傾向にあった。それは元来、日本において嫁入り前の女子が知っておくべきものとしていけ花はあり、植民地期の台湾、朝鮮の女学校・高等女学校においても、「外地」ゆえに、また民族が異なるゆえに「内地」よりも、習得（修得）の機会が多く設けられた。日本人は家庭において学べる機会があったが台湾人、朝鮮人の女生徒は家庭においては、まず日本語を話せる家族があることすら少なく、中等教育に進むことができる被支配者側の少女はわずかで、宗主国（支配者側）の文化が習えることは一面として、その少女たちの自尊心を満たすものでもあったと考えられる。いっぽう、植民地期台湾の神社例祭における奉納いけ花や、当時使用された花材やその輸送、いけ花流派に関する、新聞記事を資料とした研究成果も見られる⁽³⁾。

本稿は、これらの植民地期のありようをふまえつつ、これまで明らかにされてこなかった、日本のいけ花が第二次世界大戦後、民族の異なる台湾や韓国において親しまれている、その活動事例を地域における営みという観点から明らかにし、相互参照を交えて考察することから、現代いけ花の新たな側面を見出すものとする⁽⁴⁾。

1. 台湾におけるいけ花の様相

最初に、台湾におけるいけ花習得の事例をみていく。各対象者の年齢は2018年時点のものと
する。

【事例 1】台湾人 A さん（女性）、90 歳。居住地：高雄 流派：池坊⁽⁵⁾

以下、聞き取り調査⁽⁶⁾によれば A さんは、1928（昭和 3）年生まれ。高雄高等女学校⁽⁷⁾卒業。一家は当初、父親が台湾澎湖島の公学校（小学校）教員であったため澎湖島に住んでいたが、父親の、7 人の子すべてに中等以上の教育を受けさせたいとの考えのもとで高雄に移り住み、父親は教育資金を得るために収入の良い職業に変わった。A さんは 7 人兄弟の 3 番目で、高等女学校進学ของときはすでに高雄に住んでいた⁽⁸⁾。父親は親日家であった。

A さんは戦後、池坊のいけ花を習った。先生は台北在住の日本人女性で、台湾人医師の妻であった。まだ新幹線はなく、皆で飛行機を利用して高雄から台北まで習いに行った。その先生がアメリカに行かれたので、その先生のお弟子さんのやはり台湾人の妻である日本人女性に習った。そのころ飛行機事故があり、弟子を多数死なせることがあってはならないと、この時から先生が一人で台北から高雄に来てくれるようになった。38 歳のとき、子が 3 人いるためもあり、いけ花で生計を立てることにした⁽⁹⁾。父親が実力者であったため展覧会会場を用意してくれて花展を開き、それが新聞で紹介され弟子が多く集まった。この時の花材は、高等女学校時代の日本人の友人⁽¹⁰⁾が日本から送ってくれたものを使った。日本のいけ花に日本の花材は必要不可欠で、とても助かったし嬉しかった。

池坊の高雄支部長も経験し、60 歳代のときには池坊専永家元を高雄にお迎えした。そのころ弟子は 80 人くらいいた。父親は台北の国語学校 3 期生⁽¹¹⁾で、日本語は学校で習うほかその父親から厳しくしつけられたこともあり堪能で、さらに日本語を忘れなくなかったため、常に忘れないことを心がけてきたという。日本からの池坊の講師の先生の日本語通訳もしている。講師は男性である。

現在、毎月高雄では、日本の池坊家元の講習会が開かれているので出席している。立花の特別講習も行われ、これは上級者のみしか出席できないものである。様式として新風体、生花、立花を習う。免状も日本の家元からのものである。現在も数人を教えるほか、かつての弟子との交流が続いている。

【事例 2】台湾人 B さん⁽¹²⁾（女性）、91 歳。居住地：宜蘭（アメリカ・台北）流派：池坊

以下、聞き取り調査⁽¹³⁾によれば B さんは、1927（昭和 2）年生まれ。蘭陽高等女学校⁽¹⁴⁾3 期生。父親は医師で戦後初代市長となった。【図 1】【図 2】参照。

蘭陽高等女学校では池坊のいけ花を習った。習いたい人のみ 20～30 人くらいであった。放課後の部活動はこのほかバレーボール・バスケット・テニス・陸上・音楽（ピアノ）・お琴があった。同校を卒業して小学校の先生になったが 1947 年にやめた。22 歳ころから宜蘭で教室を持っていた 2 番目の姉⁽¹⁵⁾に池坊を習う。姉は何にでも厳しい人で、いけ花についても厳しくしつけられた。結婚して 1960 年代、30 歳ころは台北に住み、池坊・瑞和支部長の羅徐瑞鶴⁽¹⁶⁾（日本人）に学んだ。展覧会にも出展した。京都の池坊家元講習会には瑞和支部の皆で 3 回参加し、毎



【図1】蘭陽高等女学校 校舎 1940年 蘭陽女子高級中学同窓会蔵



【図2】蘭陽高等女学校 作法室といけ花 1940年 蘭陽女子高級中学同窓会蔵

回1週間滞在した。姑との関係など家庭での悩みもあったが、いけ花をすることで乗り切ることができた。

1973（昭和48）年頃、插花教室を始めた。救国団⁽¹⁷⁾の插花班では、宜蘭と台北の両方で教えた。宜蘭県政府の立案で插花協会が作られ総幹事になり、会長は姉（前出）であった。1975年には日本の池坊から年2回講習に来ていたので参加した。1986年、免状「大卷⁽¹⁸⁾」が授与された。花型（形）は立花、生花、自由花と、すべて習った。池坊の最高位の資格を持っている。いけ花の魅力は、基本から一段ずつ上っていけるのがいい。自然の姿、宇宙があるが花材、線の表

現に自分の発想を入れられる。いけ花は応接室の上の方に置いた。1995年、夫の退職後、アメリカ・サンフランシスコに家族で移り住んだ。河崎マミのフラワーアレンジメントを学び、資格をとり娘とともに花屋を営んだが、権利を譲渡し、近年台湾宜蘭に帰国している。

いけ花については部屋の中に花があると良い。舅が花好きで特に蘭が好きだった。日本のいけ花は学問が深い。日本に負けないようにやっている。先生に恵まれ、友達を作り、皆で楽しく行い、生活が潤って楽しい。花があると落ち着きを感じる。お弟子さんとの付き合いが続き、事あるたびに訪ねて来てくれる。つながりとか絆ができていく。日本らしさを伝えるものでもある。

戒厳令⁽¹⁹⁾下でも、女のやることだから安全、政治的色彩なしということで、日本の家元への免状の入金も郵送にも影響はなかった。いけ花の流派については、台湾では池坊のほかに小原流、安達式、草月流の名を聞く。

【事例3】台湾人Cさん60歳（女性） 居住地：宜蘭県蘇澳 流派：池坊

以下、聞き取り調査⁽²⁰⁾によれば、Cさんは池坊・瑞和支部長の羅徐瑞鶴（前出）の弟子の台湾人女性⁽²¹⁾に学んだ。宜蘭で池坊を学んだ人はこの先生の門下が多い。免状は沢山持っているが教えてはいない。数年前に退職したが公務員をしていた。今は習っておらず、家で自分の思うように花をいけて楽しんでいるが、日本の花がなく台湾の花材で生けていけ花といえるかどうかとも思う。日本語は話せない。台湾でいけ花を習う男女の割合は、男性1人に対し、女性30人位と思うという。

また、宜蘭県政府が発行した民国99年～109年（2010～2020年）「教学支援工作人員合格証書」認証項目：総合活動「插花」、と記されている証書を所有している。国民中小学校でのいけ花の活動を指導できる証明書である。

しかし37歳になるCさんの娘さんは、いけ花には興味があるが習っていないという。それは家の近くにいけ花の先生がいなかったということ、あったとしても他の習い事よりも月謝が高いことがあり⁽²²⁾、いけ花は高級な趣味に位置づけられているという。彼女は、台湾原住民の言語に興味を持ち、子育てをしながらも、それに関する勉強やボランティアを続けている。日本に留学経験があり、日本語も堪能である。今回のCさんへの聞き取り調査も、彼女の通訳に依った。

【事例4】台湾人Dさん87歳（女性） 居住地：台南・台北 流派：小原流

以下、聞き取り調査⁽²³⁾によれば、Dさんは1931（昭和6）年生れ。台南市の出身で1943（昭和18）年台南第二高等女学校⁽²⁴⁾に入学した。高等女学校在学中は戦争のため、女学校でいけ花は教えられていなかった。しかしDさんは、お姉さんが台南第二高等女学校在学中にいけ花を習い、家に帰ってきて花をいけていたので、いけ花を見て知っていたという。

Dさんは小原流のいけ花を1956年ころ、台南の三上插花研究所で習った。三上朝風⁽²⁵⁾という日本人女性で、夫は台湾人であった。日本人から日本語で習い、テキストも日本語であったが、

戦前に日本語教育を受けており、日本語には不自由なく問題はなかった。現在は台北市に在住。同流台北支部の役員等を歴任した。

【事例5】台湾人 E さん 85 歳（女性） 居住地：台北 流派：小原流

以下、聞き取り調査⁽²⁶⁾によれば、E さんは 1933（昭和 8）年生れ。1945（昭和 20）年台北第三高等女学校⁽²⁷⁾入学。高等女学校在学中にいけ花を習ったという。

いけ花を始めた理由は、1955 年に、今は公園になっている士林の蒋介石官邸で、蒋介石の誕生日を記念する花展が開催されている⁽²⁸⁾ことを新聞で知り、見に行き習いたくなり、1956 年から始めた。その花展を行っていたのは鹿野幸枝（江）⁽²⁹⁾という日本人女性で、夫は台湾人の欧先生という人だった。この鹿野先生は 10 年くらい前に 82 歳で亡くなられた。テキストは日本語であったが、戦前に日本語教育を受けており、日本語に不自由はなく問題はなかった。

結婚前、実家は両親が仏教を信じていて、仏壇の前の花を毎週変えて喜ばれた。もともと絵が好きで、お稽古で習ったいけ花は必ずスケッチしていた。カメラがまだなかった時代でもあった。昔はお稽古は着飾っていくものだったので、いつもおしゃれをして出かけた。1965 年に初めて日本へ観光に行った時、小原豊雲と勅使河原蒼風の二人展が開催されていた。

結婚して子は男 2 人と女 1 人、子育てに手のかかる時期が終わり 35、6 歳で鹿野先生の助手をするようになった。30 年前（1988 年ころ）、50 歳代のころ、台北の文化大学夜間部分校で課外活動として 70 人位を教えた。また民間の服装会社や士林の電気会社でも教えた。その時、いけ花は配色も習えると教えた。小原流台北支部の役員もした。いけばなインターナショナルの活動もしている。

現在、小原流家元の許可を得て、自分の名前を冠にした小原流插花の中国語テキストを作って使用、販売している。現在の台湾では日本語ができない人が多いためである。また自分が習った頃には、先生から直す理由はいわれなかったが、現在の生徒は例えば何故 30 度傾げるのか説明がある。自分が日本語を忘れないのは、辞書を引いて小原流の流派雑誌『小原流插花』や『桔梗』を読むからである。

E さんによれば台湾で日本のいけ花は 1 番目に池坊があり、2 番目に小原流、3 番目に草月流がある（多い）。ほかに松風流⁽³⁰⁾、古流、未生流などが行われているという。

【事例6】台湾人 F さん（女性） 71 歳 居住地：台北 流派：小原流

以下、聞き取り調査⁽³¹⁾によれば、F さんは最初、学生時代に大学で放課後、日本人女性で台湾人を夫に持つ郭良芝に池坊を 2 年間学んだ。その後、職場同僚の小原流の盛花を見て習いたくなり、日本人女性の先生に習った。それ以前に高校生の時（1960 年）、「中央日報」という新聞で草月流の勅使河原蒼風のいけ花を見たことがあり、きれいだと思ったという。

いけ花は変化をつけて生けるものと思う。生けることを心から嬉しいと思い、好きで、生きが

いでもある。いけ花は模倣と模索なのでテキストは必要としない。家では壁の前に机を置いて飾ったり、ソファの横のテーブルに置く。いけ花をやる人が少なくなったのは景気が良くないからだと思う。20～30年前までは気品が高く家の中が美しくなる、自然観賞ができるということと、いけ花は高級な趣味であったが、今はいけ花を習うこと自体はそれほど高級とは思われない。花材は1回400円前後でそれを含めて、1回2000円くらいで教える。しかし専門的にすると花器の種類が多く、費用がかかる。日本の花材で「おもと（万年青）」などは台湾にないため輸入物で値段が高い。他にも蘭、ドラセナ、アザミ、レースフラワー、スターチスなど、マレーシアやオランダからの輸入で花材代が高くなる。

農会（農業協会）で教えている。生徒は全員女性である。40年前は一度に93人教えたが、今は40人と半数以下である。会員の福祉として設けられている。1回2時間くらい教える。生徒の年齢は今は30～70歳と幅がある。最近の生徒はいけ花を習っても免状を取る人は少ない。興味が仕事のための語学やパソコン、美容のヨガ、フラダンス、カーブス⁽³²⁾など運動の方に向いている。また、いけ花は花材の取り合わせや花の表情、枝ぶりを考えて自分でいけなくてはならず、容易いことではなく難しいものと思う。

台湾にある流派としては池坊、小原流、草月流、古流、未生流を知っている。台湾のいけ花に関する組織としては1966（民国55）年に中華民国插花協会（民国90年、中華插花協会と改称）が創設されている⁽³³⁾。現在、小原流台北支部長をつとめる。60歳で大学院に入学し、国立台湾藝術大学美術学院で小原流插花藝術についての修士論文（中国語）を作成した⁽³⁴⁾。1か月に1回いけばなインターナショナルの活動もしている。戦後生まれで中国語で育ったが、日本語を習得している。

【事例7】台湾人Gさん（女性）91歳。居住地：高雄 流派：小原流

以下、聞き取り調査⁽³⁵⁾によればGさんは、1927（昭和2）年生まれ。1943年屏東高等女学校⁽³⁶⁾を卒業した。女学校のときにいけ花を習った記憶はない。いけ花を始めたのは30歳すぎたころ、久保田鉄工が高雄に合弁会社をもち高雄工場ができ、その日本人工場長の日本人の奥さんに習い始めた。日本語のテキストだった。そこに花好きの者があつまった。最初びっくりしたことは、小瓶に小さい花をいれたことだった、今は自分の『插花之芸術』という作品集も出しているし、庭の小さな花をいれるのが好きである。日本語は堪能で1970年代、小原夏樹副家元が新婚旅行に台湾にいらしたとき案内した。

弟子とは「人柄のお付き合い」で25年、28年、30年来ている人もある。屏東から自宅のある高雄（電車で30分）まで通ってきてくれている中学校、高校の英語や数学の女性の先生で、その人たちはお花の先生はしない。また、台湾でお花をやる男性はだいたい花屋の男性で、力仕事などができるのがよい。

高雄で支部のような集まりができたのが1971年で⁽³⁷⁾、それが高雄支部として創立したのが

1981年であった。

【事例8】台湾人Hさん（女性）60歳。居住地：高雄 流派：小原流

以下、聞き取り調査⁽³⁸⁾によれば、Hさんは1958年生れ。20代（1980年代）に日本に留学、東京の専門学校で勉強していたときに小原流を習得し、以後、日本に直接通い稽古を続けている。家元・小原流会館の講習会に参加し、免状も取得している。現在、高雄支部長をつとめる。日本語も留学経験があるため話すことができる。母親は屏東高等女学校の出身という。

Gさん（事例7）とHさん（事例8）、お二人一緒に聞き取りをさせていただいた。そこでは、日本と台湾では住居そのものや室内空間が違うので、応用形としてや、民族性（自分の感覚、花材）で、日本のいけ花を変えている。やはり時、場所、目的というTPOが大切と考えている。最近は若い人がいけ花を習わないので支部の後継者に困っている。1990年代、高雄支部は会員が800人位いたが、今は300人位でダンス、ゲーム、パソコンに興味が移っている。

2017（平成29）年7月現在、台湾の小原流は台北、台南、高雄の3支部がある。ほかに日本のいけ花の流派として未生流、古流、草月流、池坊、嵯峨御流があり、また「中華花芸」という中国（台湾）のいけ花がある、しかしそれは小原流や池坊のいけ花から作ったものであるという。

【事例9】台湾人Iさん（女性）、90歳。居住地：台北、東京ほか 流派：小原流、池坊、中国插花

この事例については聞き取り調査ではなく、Iさんの著書『插花藝術の薪傳 生活與插花丙輯』⁽³⁹⁾の記述からみていく。まず同書「作者簡歴」から、Iさんが1928（昭和3）年生れの台湾人女性であることがわかる。1945（昭和20）年、彰化高等女学校卒業⁽⁴⁰⁾。結婚後1951（昭和26）年、夫の仕事の都合で東京に住むとともに、小原流幹部真下光爾に師事した。1956（昭和31）年、小原流家元教授の資格を得る。以後、夫の仕事の都合等のため日台両国に暮らす。1964（昭和39）年、小原流の工藤和彦⁽⁴¹⁾に師事し、1972（昭和47）年、池坊の藤原幽竹⁽⁴²⁾に師事した。その後いけばなインターナショナルの活動にも参加、いけ花（插花）に関する図書も出版した。1995（平成7）年・1996年には中国插花に関する講演を、中華民国教育部に関係して行う。2001（平成13）年、本著作を出版するとともに「国家文化藝術基金会」に入った、と記されている。

またこの著作⁽⁴³⁾のなかに以下のような記述がある。「型式化されたイケバナは、確かに日本人が創造した芸術であり、日本の風土、人情、社会事情の中から生まれてきた插花である。それは中国插花の初源を伝えたものではない。日本のイケバナの歴史は流派の発生史であって、中国の插花の歴史ではない」。ここでは中国插花の歴史を再考し、そのなかで日本のいけ花との関係を考えるということの必要性が述べられている⁽⁴⁴⁾。

以上、9件の事例からは多くの場合、第二次世界大戦後（以下、戦後）、日本のいけ花を台湾において、台湾人女性が直接に日本人女性教授者から習ったことがわかる。そこでは植民地期に高等女学校などでいけ花を実際に習得した経験からというよりも、むしろ植民地期にうけた日本語教育がいけ花の習得やその後の活動につながったと考えられる。留学や夫の仕事の関係で日本に滞在し、いけ花を習う場合もあった。また習得理由として、戦前のようにいけ花が上層階層の家庭においておこなうもの⁽⁴⁵⁾ということよりも、展覧会で小原流盛花を見て習いたいと思ったというように、日本のいけ花自体に魅力を感じて習得を望んだことがいえる。

また戦後の台湾におけるいけ花の日本人女性教授者は、戦前に台湾に暮らした経験を持つ者ではなく、多くの場合、日本の大学に留学し社会的地位のある職業を持つ台湾人の夫に伴われて來台し、確固たる生活基盤、社会的基盤を持って新たに台湾に暮らした日本人女性であったといえよう。

池坊、小原流の習得は、日本における場合と同様に、家元の免状発行を通して行われ、講習会も日本から男性講師が定期的に訪れている。しかし、日本と台湾では気候が異なるため、花材も異なり、例えば枝や茎の長さ、太さ、しなり方なども異なる。いけ花に花型（形）があったとしても同様のものをつくるのが難しい場合も多い。輸入、さらに高価で花材を入手できない場合もある。同様のものでも稽古をし難く、台湾の花材や感覚で作られたものを、日本のいけ花といえるのかどうかと考えることがあるという指摘もなされている。置く場所も異なる。本来いけ花を置くべき場所とされる床の間は台湾にはない。いっぽう日本のいけ花との共通点として、いけ花を通じた長年にわたる「人柄のお付き合い」や、花を挿す行為といういけ花そのものの楽しさ、悩みを払拭させてくれるもの、西洋のフラワーアレンジメントと異なる線の構成、数少ない花材の使用の魅力ということもある。

しかし台湾におけるいけ花の流行は2000年ころまでで、それ以後は徐々に下火になっている。聞き取り調査からは、趣味としてパソコンや外国語会話、スポーツなどが台頭してきたためという。実際に高雄市内の分館を含め高雄市直立図書館のいけ花に関する所蔵図書調査を行い確認した⁽⁴⁶⁾が、いけ花に関する図書は1990年代のものが最も多い。日本語のいけ花の本、中国語のいけ花の本、また日本語図書の中国語翻訳本もある。いけ花は台湾では「插花」「花藝」と記される。同図書館には近年（2000年以降）出版されたいけ花の図書はほとんど見かけず、商業的なフラワーアレンジメントの雑誌が入っていることは、日本も同じ傾向にあるといえよう。

留意するのは事例8に話題となり、事例9にも関連するが、日本のいけ花流派活動とは別に1986年、「財団法人中華花藝文教基金会」会長黄永川が設立され⁽⁴⁷⁾、これを「中華花芸⁽⁴⁸⁾」とよぶ中国插花の活動も存在することである。すでに中国插花史⁽⁴⁹⁾も研究成果として出されている。中国（台湾）人がいけ花を行う場合、台湾における風土、人情、社会事情等を考える必要があることから、このような中国插花の存在は否定できないといえよう。しかし今後、台湾史⁽⁵⁰⁾としてのいけ花の位置づけも考える必要が出てくるであろう。

さらに日本のいけ花が、蒋介石官邸で行われる誕生祝を記念する催しに取り入れられ、救国団で教えられたこと⁽⁵¹⁾、宜蘭県政府の教学支援活動として取り入れられていることなどからは、台湾の地域文化・教育政策の一環として、日本のいけ花が取り入れられていることがわかる。

2. 韓国におけるいけ花の様相

2-1 これまでに明らかにしたこと⁽⁵²⁾

韓国において日本のいけ花は、いけ花としてではなく朝鮮戦争後 1956 年ころから、植民地期ないしは光復後（第 2 次世界大戦後）に日本のいけ花を習得した韓国人女性により、コッコジとして始められ、韓国社会に広まった。ハングル（韓国語）でコッは花、コジで切り刻むという意味で、生花と書いてセンファと呼ぶことは、反日の立場から抵抗があったため使用されなかったという。筆者はこれまでの史資料・聞き取り調査から、韓国においてコッコジ⁽⁵³⁾が始められる場合 5 つのパターンがあると考え、1～4 の 4 パターンまでを明らかにした。以下、概略を述べる。

【パターン 1】植民地期に朝鮮人女性が、高等女学校卒業後にいけ花を習い、朝鮮戦争後に教え、コッコジの会をつくった。その後来日し、日本のいけ花・池坊などを習う。世界各国に韓国いけ花としてコッコジを広めたことが業績として注目される。1963 年、朴正熙⁽⁵⁴⁾大統領時代の大統領府（青瓦台）の玄関、執務室、応接室、食堂などの花を、任華公は陸英修大統領夫人の紹介で担当することになり、それは 18 年間続いた⁽⁵⁵⁾。事例：任華公⁽⁵⁶⁾。【図 3】参照。



【図 3】任華公 作 コッコジ
出典 任華公『花藝』主婦の友社 1997 年（ハングル）

【パターン 2】朝鮮人女性が、朝鮮戦争にともない日本に滞在・進学、そこで池坊、草月流いけ花を習い、韓国へ帰国後、コッコジの会をつくった。業績としてコッコジ史を確立していることが注目される。事例：高霞水⁽⁵⁷⁾。【図 4】参照。



【図4】高霞水 作 コッコジ
出典 高霞水『韓国伝統花藝：思想と歴史』ハス出版社 2006年（ハングル）

【パターン3】植民地期に日本に居住していた朝鮮人女性が、高等女学校卒業後未生流を習い、日本でならったいけ花を、戦後、韓国に帰国してコッコジとして教えた。事例：金仁順⁽⁵⁸⁾



【図5】嶋元恵美子「今月のコッコジ」『女苑』1962年6月号 女苑社

【パターン4】朝鮮戦争後、1962年⁽⁵⁹⁾、日本人の夫がソウル駐在員となり、日本人の妻子も同行、妻がソウルでいけ花を教えた。夫妻は植民地期朝鮮に暮らした経験を持ち、妻は戦後日本で池坊、草月流を習得していた。『女苑』のコッコジ講座で草月流の型のいけ花をコッコジとして紹介し（【図5】参照）、結果的に日本のいけ花が、韓国のコッコジであることを隠すことなく語った⁽⁶⁰⁾。事例：嶋元恵美子。

以上パターン1～3からは、コッコジを作ったのは植民地期に日本の高等女学校を卒業していて、日本文化に通じている韓国人女性であり、韓国でコッコジを始めた後も日本に出向き小原流、草月流、池坊などのいけ花を学んだという。植民地期は日本人としてあることを余儀なくされ日本語に堪能なため、日本語で行われるいけ花の習得や交際に不自由はなかった。またパターン4からは、日本のいけ花をコッコジとして教えたことがわかる。

以上の事例からは、コッコジには家元制度がなく会を結成するのみで、決まった花型もなく自分のいけ花を教えるものであったこと⁽⁶¹⁾が明らかとなっている。また置く場所も日本において基本とされる床の間は韓国にはない。この時点でコッコジは作品としてはいけ花に似ているが、存在としていけ花とは異なるものといえる。しかし、いけ花がコッコジとしてあったともいえ、難解な存在といえよう。

本稿では新たに【パターン5】として、朝鮮戦争後、日本の大学で学んでいた韓国人の夫の就職による帰国に伴い、日本人女性である妻も渡韓、日本で修得した小原流のいけ花を、大邱^{テグ}でコッコジとして教えた事例について明らかにし、これまでの4つの事例を交えて考察する。

2-2 パターン5の検討

【パターン5】日本人女性で、日本に留学していた韓国人の大学教員と結婚し、1960年代末以降現在まで韓国に居住し、現在も小原流のいけ花を教えている。博士（学術）、元大学教授（専門：日本語教育）、小原流教授。事例：横山（徐）景子

聞き取り調査⁽⁶²⁾によれば、横山氏は1934（昭和9）年生まれ、秋田県出身、84歳。高校までは秋田で育った。東京の女子大を卒業後、日本航空に事務職として入社し東京で暮らしていたが、大学教員の韓国人男性と結婚後、1960年代終わりから韓国大邱で小原流いけ花をコッコジとして教えた。

当初、1970年代の韓国はまだいけ花を嗜むような社会状態ではなく、不安定な社会であり、庶民層はその日食べることで精いっぱいであったが、富裕層の女性は女中を使い余裕ある生活をしていた。1971年、近所の若い有名女子大を卒業したお嫁さんの目に、自宅に生けた花がとまり教えてほしいと頼まれた。彼女は世界でブームになっていた前衛いけ花、勅使河原蒼風や小原豊雲を知っていた。自宅がいけ花教室を始めたが、生徒が増えて数か月で大邱百貨店の5階に教室移転するほどになった。毎年いけ花展も催した。反日感情が強いなか、「小原流いけ花」とは

表面にかかげることはできず、韓国人の夫の苗字の名前を冠に付け、「徐コッコジ教室」とした。しかし花屋さんは日本語で懐かしそうに話しかけてくれて、花材を準備してくれた。親日であった。水盤は骨董屋さんで見つけたほか注文制作し、はさみと剣山は鋳物屋さんでつくってもらった。

このこともあり、いけ花についての考えを深めるため 1976 年 3 月、42 歳の春、大邱にある大学の大学院修士課程で美学を学び始めた。折からの日本語ブームで 1979 年、大学の日本語講師になった。その後大学院博士後期課程に進学し、博士号を得た。教授となり 1999 年、定年退職まで勤めた。1994 年 8 月には、大邱グランドホテル 3 階で百名からなるコッコジ展を開催するとともに、同ホテル 5 階で自らの率いる「雲堂花藝術教授連合会」還暦記念展を開催した。コッコジはコツ芸術と言われ、花の芸術と捉えられている。「雲堂（ウンダン）」とは小原流を指し、「雲」は小原流家元小原豊雲の一字、堂は教室をさす。つまり小原流のいけ花教室という意味であった。

話はさかのぼるが 1966 年、勤務先を東京からソウル支店に変え、初めて韓国ソウルに住んだとき、この事務所にコッコジを毎週生けに来るお花の先生がいた。それは日本でいけ花をやっていた自分の目には、とても初歩的なものに見えた。1967 年に大邱に移り住んだが、1968 年に任華公（【パターン 1】）がはじめて大邱でコッコジの展覧会を開いたことを記憶している。産休をとっていたものの 1969 年に会社を退職して、大邱で子育てをしながらいけ花を教え始めたとき、大邱には他にも 2 人のコッコジの先生がいた。花材も道具も不足だらけだったが、1970 年から毎年展覧会や研究会をやり、沢山の仲間ができた。コッコジ人口は徐々に増え、「女性の自負心と憧れの趣味」、「生活や経済的余裕のある人たちの優雅な趣味」になった。1980 年代、韓国コツ芸術作家協会の理事になった。それは 1960 年代にソウルで発会した社団法人韓国コッコジ協会から分かれてできた協会であった。

また、徐コッコジ教室（小原流いけ花）の一番弟子ともいえる韓国人女性⁽⁶³⁾の夫の母親（姑）は日本人で、彼女からは嫁にいけ花でもなんでもよいから、日本人としての嗜みを教えてほしいと頼まれた。この韓国人女性は、第 13 代大韓民国大統領盧泰愚⁽⁶⁴⁾夫人と高等女学校の同窓という関係から、2 年間くらい週一回、青瓦台の大統領の居住空間にコッコジを生けに行っていたという。海外からの賓客を多く迎える会場とか、そういった場所のためではなかった。

1996 年、社団法人ソラブルコツ芸術協会（Flower Art Association of Seorabol）を創立し、初代協会理事長に就任した。ソラブルとは住んでいる大邱の旧名である。3 代目と 4 代目は弟子が就任し自分は顧問をつとめた。日本のいけ花流派の韓国への進出は、近年やっと認められ現在、韓国の小原流はソウル支部とこの「大邱雲堂スタディグループ」がある⁽⁶⁵⁾。日本の流派としてのいけ花が韓国社会に認められることがあまりにも遅かったと感じるという。

さらに日本のいけ花だけでは韓国の生活、現代の生活に適する花や作品が作れないと思ったため、西洋の花である新妻尚美のローヤルフラワーを、1996 年ごろから日本で習得し、資格を得

て必要な時に生かしているという。個人的にここ10年、日本・韓国を行き来するようになった。

以上、この聞き取りからは、日本の小原流いけ花がコッコジとして、韓国の女性に教えられていたことがわかる。横山氏の教室の人気はかなり高かった⁽⁶⁶⁾。折からのコッコジブームとともに、流派として決められた教授方法、作品の型などが明確であったことがプラス要因と考えられる。しかしいずれ韓国には床の間はなく、花を置く場所は日本とは異なる⁽⁶⁷⁾。風土も異なり、それに付随して花型、花材も異なる場合もある。

2-3 コッコジの時期区分

ここでは横山氏からの聞き取りと、筆者のこれまでの史資料・聞き取り調査から、コッコジを4つの時期に分け、その流れと活動について記しておく。

1. 初期：1956～1960年代

1956年『女苑』による紙上コッコジ講座の始まりや、企画された任華公のコッコジの講座、また1964年『新家庭』にコッコジ作品の掲載が始まるなどの効果もあり、コッコジが全国規模で広がっていった。1963年から任華公により、大統領府（青瓦台）にコッコジが飾られるようになった。

横山氏によれば、韓国において心のゆとりをさがしてコッコジ（いけ花）が始められたというのが、筆者はそのいっぽうで、韓国人女性の間に、いけ花を通してかつての宗主国への断ち切れないう思いを満たしたいということがあったのではないかと、推察する⁽⁶⁸⁾。

2. 模索期：1960年代後期～1970年代

1966年「韓国コッコジ協会」、1975年「韓国コッコジ芸術作家協会」の発足。また高霞水はコッコジ史を手がけはじめ、5年の歳月をかけ1974年『韓国コッコジの歴史』を出版した⁽⁶⁹⁾。いっぽう任華公は1970年、ソウル北西山麓に華公苑を造り、そこで大規模に花材を育て、自らが教室や作品展で使用する、陶工による白磁陶器花器の制作をはじめた。

横山氏によれば、コッコジ人口は急速に増加したものの、作品の質や技法やコッコジ界の組織づくりなどは混迷の時代であったという。

3. 全盛期：1980～90年代

最もコッコジ人口が増えた時代であり、多くの女子高校や女子大学校などでも教えられている⁽⁷⁰⁾。青瓦台にも引き続き飾られた。

横山氏によれば、各地でコッコジの展覧会も多くなり、充実した作品も多く歴史に残る作品も生み出されている⁽⁷¹⁾。この時代の優れた作品や様式の研究と評価は、後世の研究課題となる価値があると思われる。コッコジ専門家の組織も充実し、法人団体として設立され、各協会の活動も活発になり、海外に進出する機会や、国際シンポジウムなどが開催された。コッコジの理念、様式、典型的な作品はこのような時代の作品から選ばれ、歴史に残されていくと思われ、今後の

研究が望まれるという。

4. 縮小期：2000 年代～現在（2018 年）

2011 年、長年コッコジ史確立に尽力した高霞水によるコッコジ史の集大成ともいうべき図書⁽⁷²⁾が出版され、コッコジ史が一応の確立をみたと考える。

反日感情は今なお残るものの、ここ数年、池坊や小原流の流派組織としての本格的な韓国進出がみられる。いわば韓国社会に日本のいけ花が公的に認められるようになったということであり、画期的なことといえよう。この場合、日本の歴史的ないけ花のありようである「生花様式」^{せいけい}「立花様式」^{りっか}は、最近では日本においてもマタギ（又木）、コミワラ（込藁）などの伝統的な花留が使用されず（教えられず）、剣山で教えられる場合が多いが、韓国人女性のなかには、剣山でなく本来の花留の手法が学びたいと望む者など、日本のいけ花にこだわりを持つ人々も増えている⁽⁷³⁾。また、コッコジを学問的に研究しているコッコジ作家⁽⁷⁴⁾もあり、年一回、韓国・中国・日本の研究者によるコッコジセミナー（学会）も開催されている。

横山氏によれば、1990 年代初期頃からウエスタン、ヨーロッパのフラワーアレンジメントの波が押し寄せ始め、コッコジ界は一種の混乱状態に入り、さらに 2000 年代に入り、コッコジ人口は減少し、教室を維持できず自宅でレッスンをしている先生も多くなっている。愛好者は高齢化しているが、設置場所として教会の花などに活路を見出し、活動が続けられているという。

おわりに

日本のいけ花は第二次世界大戦後、台湾では日本の家元制度に則った形で習うことが主流を占め、韓国では自らの民族のいけ花をコッコジと呼び、広まった。

しかしまず台湾の場合、日本のいけ花を家元制度とともに取り込んだとしても、そこには風土の相違からくる花材の相違、花の型・形の変化、飾る場所が異なるなど、日本のいけ花そのものを取り込むことは容易ではない。いっぽう 1986 年に財団法人「中華花芸文教基金会」が創設された。同会が現在行っている挿花の型は戦後、池坊や小原流を学ぶことからつくられたことは周知のことであるものの、同会の挿花史のなかには明記されていない。

次に韓国の場合、いけ花をコッコジと呼び改め、韓国の生活に則した形に在り様を変えた。このため日本のいけ花の根幹ともなっている家元制度、型の踏襲は取り込まれていない。しかし日本のいけ花を行っているという思いが人々の心の底にあった。またそこには複雑な思いが存在する。

留意したいのは戦後、台湾でいけ花が流行した理由は、「盛花・投入花」という近現代いけ花の様式の美しさだったことである。「盛花」様式への支持は韓国においても同様であったといえる。さらに、いけ花を通して培う人と人とのつながりは日本、台湾、韓国いずれも同様の面があり、辛いことを乗り越える助けとなるものでもあった。また今日、日本、台湾、韓国いずれも、

いけ花を習う人の数が激減傾向にあるなどの近似している面もみられる。

さらに、本調査結果において最も注目したいことは、台湾では蒋介石官邸で誕生祝のいけ花展が行われ、韓国でも朴正熙大統領時代の青瓦台執務空間にコッコジが飾られ、その後盧泰愚大統領時代の青瓦台においても同様の空間に、小原流を習得した韓国女性のコッコジが飾られた。ここからは台湾、韓国の政治的空間をも巻き込んだいけ花の存在が見出せよう。蒋介石、朴正熙、盧泰愚いずれも戦前の日本の生活文化を良く知る者であった。またそれを繋いだのは植民地期、日本の高等女学校を卒業した女性たちであった。いっぽう台湾では蔣経国がいけ花を救国団の社会教育活動に取り入れ、宜蘭県政府は日本のいけ花である池坊の習得者が插花協会を組織することを認め、別に「插花」の教学支援工作人員の認定をしていることは、日本のいけ花活動が両国の政治動向の一端に存在していることがいえよう。しかし一方で「中華花芸」という新たな動きも見られる。親日、反共のアピール等の問題も思われるが、さらなる検討を加えることが必要といえる。

以上のことから、両国ともにいけ花が植民地期から継続しているものであるとともに、新たな出発をしたものと見てよいといえよう。今後、「中華花芸」やコッコジが両国のいけ花文化史として、どのように位置づけられるのかを考えていくことから、日本のいけ花を考えていくことも必要といえよう。

謝辞

本稿を成すにあたり聞き取り・史資料調査にご協力くださいましたすべての方々に、深くお礼を申し上げます。

本稿は2017年6月朝鮮史研究会関西支部会、2018年2月国際いけ花学会春季例会、2018年4月民族藝術学会第34回大会、2018年12月日本台湾学会第16回関西支部会研究大会・台湾史研究会共催における報告に、加筆修正を加えたものである。

各回におきまして貴重なご教示を賜りましたことを、記して深謝いたします。

本稿は、2016・2017年度追手門学院大学特色ある研究奨励費による研究成果の一部である。

註

- (1) いけ花の成立と展開については、小林善帆『「花」の成立と展開』和泉書院2007年で検討している。いけ花史については、小林善帆「いけ花史試論」前編・後編『いけ花文化研究』創刊号、第2号 国際いけ花学会 2013、2014年、同「女性といけ花」全24回『小原流插花』一般財団法人小原流 2017、2018年等において考えてきた。
- (2) 小林善帆「植民地台湾の高等女学校と礼儀作法空間」『民族藝術』第25号 2009年。同「植民地台湾の女学校といけ花・茶の湯」『藝能史研究』第189号 2010年。同「植民地朝鮮の女学校・高等女学校といけ花・茶の湯・礼儀作法 - 植民地台湾との相互参照を加えて -」国際日本文化研究センター紀要『日本研究』第47集 2013年。同編著『植民地期朝鮮の教育資料』Ⅰ・Ⅱ 国際日本文化研究センター発行 2015、2016年。同「『女性満洲』と戦時下のいけ花」河原典史・日比嘉高編『メディア - 移民をつなぐ、移民がつなぐ』クロスカルチャー出版 2016年（初出、『立命館言語文化研究』26巻第4号）。同「植民地「満洲」といけ花・茶の湯・礼儀作法 - 流派、文学、女学校・高等女学校を通して」『いけ花文化研究』第4号 国際いけ花学会 2016年ほか。

- (3) やまだあつし「日本統治時代台湾の神社例祭における奉納いけ花 -『台湾日日新報』記事を資料として-」『いけ花文化研究』第4号 2016年。小林善帆「植民地台湾のいけ花・茶の湯」2008年度民族藝術学会台湾大会報告レジュメ、パワーポイント 於台湾仏光大学 2008年。
- (4) そのほか第2次世界大戦後、いけ花が流行した国としてアメリカ、オーストラリアが挙げられる。またインドでも戦前から行われており、現在、当該国に関しても資料調査を行っている。
- (5) いけばな池坊 550年記念誌編集委員会編『いけばな池坊 550年記念誌 花の礎 (いしずえ)』歴史・支部編 平成24年 財団法人 池坊華道会によれば、池坊は、2012(平成24)年の時点で台湾に10支部(台北、瑞和、台南、台中、高雄など)・2支所(嘉義など)を持つ。
- (6) 2017年7月7日高雄カインドネスホテル。同年9月22日高雄アンバサダーホテル。同年10月4日 Aさん宅1階カフェ。
- (7) 1924年、高雄に創立、日本人を主な対象とした名門高等女学校で、台湾人は1クラスに数人であった。第二高等女学校開校のため、1943年高雄第一高等女学校と改称。現在、高雄市立高雄女子高級中学として継承されている。
- (8) 澎湖島には中等教育機関がなく、7人の子の授業料に加えて寄宿舎代等は、かなりの額となった。また、高雄に移住しても教員の給料では、子だくさんの学費は賄えなかった。さらに長男は東京帝国大学に進学している。
- (9) この間の経緯についてはお話しいただいたが、Aさんの希望により割愛する。
- (10) Aさんは高等女学校の学友が日本に帰る時、家財道具を台湾人に買い叩かれていたため、お茶碗1つにしても少しでも高く売れるようにと取り次いで、感謝されたという。
- (11) 植民地台湾において、日本語教育と教員養成のために1896年に設立された学校で、台湾における日本語教育の中心的存在としてあった。
- (12) 宜蘭人文系列4『宜蘭女声 - 阿媽的故事』教育篇 宜蘭県史館 2014年 187~231頁
- (13) 2018年7月15日、於宜蘭市Bさん別宅。同席者：竹中信子(台湾女性史研究家)、洪若英(国立宜蘭大学)。2018年11月21日、於宜蘭市洪若英氏別宅、同席者：洪若英、Bさん夫
- (14) 宜蘭県に1938年4月開校、現在、国立蘭陽女子高級中学として継承されている。同校に関して、宜蘭文献叢刊9『日治下の軍事與教育』宜蘭県立文化中心 中華民國85年、300~303頁。『宜蘭文献雜誌』110期 宜蘭県史館 中華民國106年、56~79頁に取り上げられている。
- (15) 姉は3人。3人ともに当時は蘭陽高等女学校が設立前だったので、基隆(キールン)高等女学校を卒業した。在学中に同校でいけ花を習ったという。同校は日本的な文化活動を重視する学校であったという。
- (16) 1919年山口県生まれ、本名福本鶴子。日本の東北大学で建築を学んだ台湾人男性と日本で結婚、夫にともなわれ戦後台湾に居住した(欧秀珍「從台湾近現代花芸發展歷程(1895~1986)論「中華花芸」成立之時代意涵」南華大学視覚興媒体芸術学系碩士班 碩士論文 民国99年(中国語)70、71、215頁による)。
- (17) 蒋介石(生没年：1887~1975)により、1952(民国41)年、「中国青年反共救国団」として成立、蔣経国(生没年：1910~1988)は初代主任(小谷豪治郎『蔣経国伝 - 現代中国八十年史の証言』プレジデント社 1990年、351頁ほか)。その後、「救国団」として、学校現場、長期休暇プログラムなどの活動が行われるようになった(高橋明郎「『幼獅』創刊 - 救国団と台湾反共文学」『香川大学経済論叢』第82巻第4号 2010年)。
- (18) 「大巻」は、華道家元池坊における根幹となる伝書である『専応口伝』の伝授をいう。
- (19) 1987年7月15日、蔣経国は38年にわたった戒厳令を解除した。
- (20) 2018年7月8日、於蘇澳鎮 金華旅館ロビー、同席者：竹中信子
- (21) 実家のある羅東の林玉鈺
- (22) 25年前、月に4回で月謝は2,000NTD(7,500円程度)+花材代であった。今は3,000NTD以上という。
- (23) 2017年3月12日、於台北シェラトンホテル

- (24) 台南の主に台湾人女子が進学した名門高等女学校。1921年、台南に開校、1922年、台南第二高等女学校となる。現在、国立台南女子高級中学。
- (25) 三上朝風は、1926年生まれ、1949年来台、1956年三上插花研究所を開く、1985年小原流台南支部を設立（前掲注16 欧秀珍論文72、73、217～219頁による）。
- (26) 2017年3月12日、於台北シェラトンホテル
- (27) 台北の主に台湾人女子が進学した名門高等女学校。1898年台北に開校。1922年台北第三高等女学校となる。現在、台北市立中山女子高級中学。
- (28) 蒋介石の人となりについては、日本における生活経験を持ち、「蒋介石は日本から学ぶべきことが多いと唱えてきた」（黄自進『蒋介石と日本～友と敵のはざま』武田ランダムハウスジャパン 2011年）、222、223頁、「日本に格別の想いを抱き続けた」（関榮次『蒋介石が愛した日本』PHP 研究所 2011年）、38頁とあることなどからも、いけ花に親しんだことが頷ける。
- (29) 鹿野幸江（枝）の活動についても、前掲注(16)欧秀珍論文69、73、83、95、213、214頁で取り上げられている。また、廖美容「以自然物件為媒材 小原流插花藝術研究」国立台湾藝術大学美術学院造形芸術研究所美術組 碩士論文 民国99年、254頁（中国語）においても歐幸江としての中国語図書が参考文献として挙げられている。同論文72～74頁は、戦後初期の台湾のいけ花を担った人物等について述べている。
- (30) 家元、押川如水（所在地、東京）。渡米し日本のいけ花を紹介、アメリカ人女性の門下生もいた。當時を代表するいけ花の家元であった。『婦人倶楽部新年号付録 各流大家の新作特別発表 生花の独習大画報』大日本雄弁会講談社 1954年、6、20、37、62頁
- (31) 2017年3月12日、於台北シェラトンホテル
- (32) アメリカに本社を置く、女性のみを対象としたフィットネスクラブ。現在日本でも行われている。
- (33) 前掲注(29)廖美容論文、74～76頁
- (34) 前掲注(29)廖美容論文。ほかに小原流を中心としたいけ花についての、学生7名合同による、日本語の卒業研究報告「生け花（花道）」高苑科技大学商業暨管理学院応用外語系 2010（民国99）年12月、もある。台湾において日本のいけ花に関心が持たれていることが窺える。
- (35) 2017年9月23日、於高雄アンバサダーホテル、同席者：Hさん
- (36) 1932年4月、屏東市に開校。約7割が日本人であった。
- (37) 最初に小原流の支部を作ったときに、いけ花の支部の支部長や役員になりたい人たちがいて、役員を強引にしていたという。それは裕福な家の夫人たちで、日本のいけ花にかかわることは、「高級な趣味」を持っていることになるためであった。作品展になるとGさんが皆の分を作らされたという。
- (38) 2017年9月23日、於高雄アンバサダーホテル、同席者：Gさん
- (39) 蔡湘蘋『插花藝術の薪傳 生活與插花丙輯』2001年 蔡湘蘋発行。前掲注29 廖美容論文、254頁においても同女史の『生活興插花』が中国語図書参考文献として挙げられている。
- (40) 台中市彰化にあった、台湾人生徒を主対象とする高等女学校。1919年5月開校。現在、国立彰化女子高級中学として継承されている。
- (41) 生没年：1926～2016、生前、小原流研美会会長、日本いけばな芸術協会理事を務めた。
- (42) 生没年：1894～1978、池坊の華道家、特に立華を得意とした。當時を代表するいけ花の指導者であった。『婦人倶楽部新年号付録 各流大家の新作特別発表 生花の独習大画報』大日本雄弁会講談社 1954年、4、11、15、56、57頁
- (43) 前掲注(39)『插花藝術の薪傳 生活與插花丙輯』166頁
- (44) 小林善帆「一八世紀のいけ花 –「たて花」「立花」「抛入」の相関を通して–」笠谷和比古編『一八世紀日本の文化状況と国際環境』思文閣出版 2011年においても、いけ花の「生花（せいけ）」様式の成立に、中国の『瓶史』『瓶花譜』の影響がみられることを指摘している。
- (45) 植野弘子「台湾の日常と「日本教育」–高等女学校生の家庭から」『台湾における〈植民地〉経験 日本認識の生成・変容・断絶』風響社 2011年、177、178頁
- (46) 筆者が2017年7月8日におこなった、高雄市立図書館所蔵調査（分館を含む）による。

- (47) 前掲注(6)欧秀珍論文、123 頁
- (48) 「中華花芸」の全体像は、中華花芸入門編輯委員会編 黄永川監修『中華花芸入門(-)、中華插花藝術的基本素養と観念』財団法人中華花芸文教基金会 1991 (民国 80) 年から知ることができる。しかし同書においては「中華花芸」における日本のいけ花の影響に言及していない。
- (49) 黄永川『中国插花史研究』中華民国国立歴史博物館出版 1996 年 (民国 85 年) ほか。黄永川については、前掲注 16 欧秀珍論文、前掲注 29 廖美容論文でも取り上げられている。
- (50) 何義麟『台湾現代史 -二・二八事件をめぐる歴史の再記憶』平凡社 2014 年、沼崎一郎『台湾社会の形成と変容 -二元・二層構造から多元・多層構造へ-』東北大学出版会 2014 年、を参考にした。
- (51) 菅野敦志『台湾の国家と文化「脱日本化」「中国化」「本土化」』勁草書房 2011 年、145、238、258 頁ほか。そこでは文化復興とともに学生・青年の統制が強力にはかられたというが、いけ花がそこにどのように位置づけられたかには言及されていない。いけ花とはいったいいずれの国の文化であるのか、筆者の今後の課題である。
- (52) 小林善帆「日本と韓国の文化交流 -いけ花とコッコジの相関を通して」『移民が紡ぐ日本 -交錯する文化のはざまで-』文理閣 2018 年 (初出、小林善帆「コッコジ (韓国いけ花) 草創期にみる日本人観」『立命館言語文化研究』28-3 2017 年)
- (53) コッコジという言葉は韓国式名称で呼ぶ必要から、『女苑』の編集部が使い始めたという。ほかに「插花」「花藝」とされる。任華公はコッコジを、「華藝」「オリエンタル・フラワー・アレンジメント (「東洋のいけ花」)」としている。
- (54) 朴正熙：生没年 1917~1979。1937 年大邱師範学校卒業、1944 年帝国日本陸軍士官学校卒業。大統領在任期間：1963~1979。チョ・ヒヨン『朴正熙 動員された近代化 -韓国、開発動員体制の二重性』彩流社 2013 年、278、279 頁
- (55) 陸英修と青瓦台については、文明子、阪堂博之訳『朴正熙と金大中 私の見た激動の舞台裏』共同通信社 2001 年、86~89 頁に当時の様子が記されている。朴正熙と陸英修の姻戚関係等については李祥雨、藤高明・清田治史訳『朴正熙時代 -その権力の内幕』朝日新聞社 1988 年、199~212 頁に詳しい。柳壽仁からの聞き取りによれば、任華公の京畿高等女学校時代恩師が朱月栄 (慶北高女、奈良女高師卒。柳壽仁叔母) で、朱女史の夫陸芝修 (京城帝大教授) と陸英修が従兄という関係から、任華公と陸英修は知り合ったという。
- (56) 任華公：生没年 1924~2018。2。同女史については、『韓国の旅から 32 2018 追悼 任華公女史』海琳社 2018 年、に写真、追悼エッセイが寄せられている。生前、同女史と交遊のあった上野善弘の談話によれば、小原流 3 代目家元小原豊雲は、同女史の日本における活動について、惜しめない支援をしたという。
- (57) 2017 年 4 月 29 日逝去
- (58) 1966 年、韓国コッコジ協会創立、同会初代会長。
- (59) 夫の嶋元謙郎は日韓の賠償交渉にかかわり、1962 年 12 月の賠償問題決着に尽力、1965 年 6 月の日韓基本条約締結の蔭の功労者であったという。
また 1965 年 6 月の日韓基本条約締結までは、韓国の地に日本人は寡少であったといわれることがあるが、韓国人男性と結婚して子がある場合、光復後 (終戦後) 韓国に残った日本人女性は少なくなかったという。
- (60) 『現代女性コッコジ全集』全 6 巻 河西出版社 1976 年 (ハングル) は韓国で出版されたコッコジ全集としているが、内容は、日本のいけ花の家元ならびにその高弟の、日本のいけ花の作品集である。このことから日本のいけ花を学び、コッコジが作られたといえる。
- (61) 自分のいけ花を教えるとは任華公 (パターン 1) の例でいえば、決まりは、①構成する役枝は 1、2、3 とする。②規則はできるだけ作らず、してはいけないことだけ教える。③感じたことを表現、何より楽しい気持ちで。④葉の省略、タメルことをなるべく避ける、の 4 点であった。
- (62) 2018 年 4 月 29、30 日、於横浜の横山氏別宅。2018 年 7 月 27、28 日、於韓国浦項の横山氏宅。2018

年12月21日、於 ANA クラウンプラザ神戸ホテル

- (63) 李東賢、91 歳
- (64) 盧泰愚：大統領在任期間 1988. 2. 25～1993. 2. 24。1932 年生れ、現在の大邱広域市出身、植民地期・戦前に大邱工業高校に入学、戦後慶北高校に転校、韓国陸軍士官学校出身、軍人・政治家。
- (65) 韓国の池坊は、ソウル2支部と釜山1支部とコリアスタディグループ1つがある。台湾と同様、いけば花流派とは別に、いけばなインターナショナルの活動も行われている。
- (66) 当時、横山氏が勤務する大学の教え子であり、大邱で学生生活を送っていた魯成煥蔚山大学校教授の談話（於 国際日本文化研究センター）による。
- (67) 日本においても、いけば花は床の間に置かれるばかりではないが、床の間に置くことを前提として、いけば花の形・型は考えられてきた面がある。
- (68) 前掲注52小林善帆「日本と韓国の文化交流 –いけば花とコッコジの相関を通して」『移民が紡ぐ日本 –交錯する文化のはざまで–』202、203 頁
- (69) 「コッコジ研究家 高霞水氏」『新家庭』1975 年 5 月号、54、55 頁（ハングル）にその経緯がインタビュー記事として掲載されている。『新家庭』は、韓国で 1954 年 1 月に創刊したキリスト教系月間女性雑誌。
- (70) 梨花女子大学校、淑明女子大学校をはじめとする女子大学校、YMCA、女子高校でも教えられた。
- (71) 高霞水や任華公をはじめとするコッコジ作家の作品集がだされている。
- (72) 高霞水『韓国コッコジの歴史』民俗院、2011 年（ハングル）、ほかに同『韓国伝統花藝：思想と歴史』ハス出版社 2006 年（ハングル）ほか
- (73) 2018 年 7 月 28 日、大邱市大邱ハルにおける、小原流大邱スタディグループの人々への聞き取り調査による。
- (74) 例えばコッコジセミナーを主催する韓サンスクは、淑明女子大学校大学院修士課程、ソウル市立大学大学院博士課程でコッコジ（いけば花）の研究を行い、博士号を得ている。

2019 年 2 月 21 日受理